

総合討論

司会 林鎮国

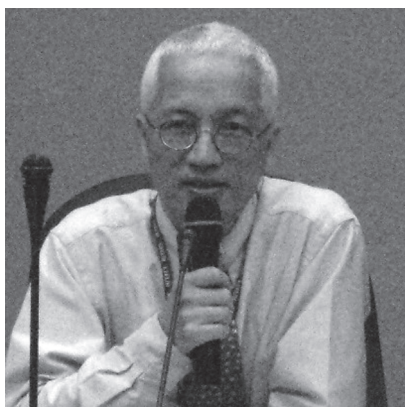
台湾国立政治大学教授

【林鎮国】 それでは、最後の総合討論の時間に入りたいと思います。

私は林鎮国と申しまして、国立政治大学哲学系と宗教学大学院の教員です。たいへん申し訳ないのですが、今日は午前中ずっと授業がありまして、最後になってようやく来ることができたという状態です。たいへん申し訳ありませんでした。

さきほど午前中の論文も拝読いたしました。竹内先生が述べられた日本人の死生観に関する論に、たいへん興味を持ちました。そして、死生学という学問をするということは、たいへん不幸なことであると、そのような感想を持ちました。(笑)

日本人の感覚では、死とは日常の一部です。そのような観点からすると、私たちがいま死生学をやっているというのは、学者があまりに頭を使いすぎて、牽強附会のようなかたちで死生学をやっているのではないのか。そのように感じるわけです。



林鎮國氏

このような考えすぎや牽強附会というのは、私自身も二十年前に経験したことです。そのとき、蔡先生が論文の最初にあげていらつしやる傳偉勲先生、——この方は台湾で死生学を提唱された方なのですが、その御著書を拝読したわけです。私はその傳偉勲先生の学生でありまして、アメリカに行つて、八〇年代にたいへん流行していた死生学というものに触れたわけです。そして、このような学問をどのように論じたらいいのかということが、自分でもよくわからなかったものですから、ハイデガーやニーチェなど、私自身もよくわからないようなものを勉強してきました。

さきほど竹内先生の論文を拝読して、救いを得るということは死生の問題ではなく、死生学の問題である、と思いました。いまお話ししたようなことは、私自身にとつて意味があるだけで、決して今日一日の討論を完全に脱構築しきつてしまおうと、そういう意味ではありません。

それではこれから、それぞれの先生方に五分くらいで、本日の議論の反省やご意見などを述べていただければと思います。

はじめに蔡先生と竹内先生に、それぞれの大学、研究会等で現在おこなわれているプロジェクトの現状について少しご報告いただき、今後我々が発展していく方向や協力関係などについて考えてみたいと思います。

それではまず竹内先生からご発言いただけますか。

【竹内整二】 死生学をすることが不幸なのかどうかということに関してまず申しあげたいのは、死生学が、「Death study」では



竹内整一氏(左)、林鎮国氏(右)

ないということです。あとで池澤先生からもご報告があるかと思いますが、東大の死生学は「Death and Life Studies」、死と生とをばらばらにしないで考えようという学問でして、あくまで不可避の死というものをもちながら、どう生き生きとして生というものを考えようという学問ですし、また、本居宣長なども言っていましたように、死んでどうなるかなどということを牽強附会的にあれこれしようという学問ではありません。

今日の議論は本当におもしろかったので、感想や申しあげたいことも多々あるのですが、さきほどもご提案があつたように、これからもぜひ、こういう試みは続けていきたいと思っております。

台湾と日本、それぞれの文化・伝統を担いながら、死生観・死生学を論じるという今日の研究会議は、いろいろなことを気づかせてくれました。その意味で、私にとって実りの多い会になりました。その中でも、私の頭にいま一番残っているのは、死というものの、あるいは死後というものに対して、台湾の先生方の発表された中身が、非常に能動的というか、主体的というか、そういうポジティブな姿勢であるということです。日本の場合ですと、死や死後というものをむしろ「あきらめ」として受けとめて、そのような感受性によって、——「救い」という言葉がそこにあてはまるかはわかりませんが、それを生の

世界で受けとめようとしています。そこには、過去を撤回したり変更したり、あるいは解除するというような試みはありません。その点が、日台の死生観に関する一番鮮やかな違いとして出てきたのではないかと思います。日本人が、死や死後をそういうかたちで受けとめていることは、「死んだらみな仏になる」という発想と異なりますか、ある意味で生前のことの善し悪しは問わない「怨親平等」という考え方に通底するものでもあるように思います。恨む者も親しい者も、死んでしまえばみな同じじゃないかという考え方です。それは、さきほども少し申しあげた「本覚論」的発想ともかわりまして、ややもすると、たとえば戦争問題などの責任のとり方において、非常に曖昧な、無責任な人間観になると批判をされる考え方でもあります。ただ、ですので、やはりそのような発想の背景には、その人々なりの死生観があるということからお互いに理解をしていく必要があるということとはあらためて感じました。

【金森修】 午前中にも言いましたが、私はヨーロッパ研究を専門にしていまして、今日の三人の日本側の発表者は、池澤さんが中国、竹内さんが日本の専門家ということでそれぞれに専門的なスタンスからのご発言をなさっているわけですが、広く東洋学という観点から言えば、私はお二人とは違い、この分野に関してはまったくの素人なのです。ですので、こういうことに関してもっとも普通で平凡な日本人が感じた感想を申しあげたいと思います。

四人の先生のお話はそれぞれおもしろかったのですが、この領域に関して素人で平凡な日本人として驚いたのが、やはり道教をめぐる二人の先生のお話でした。たとえば、亡くなった人にいろいろ手を施して、それを仙人にするというような話は、まったくはじめてうかがった話なので、非常に驚きました。

いまマイクをいただいた趣旨とは若干ずれるかもしれませんが、死生学ないし生死学そのものの中で、生や



池澤優氏（左）、金森修氏（右）

死に関して学問的に考えるというだけではなく、我々が生きている現代では、いろいろな意味で、我々の生も死も政治的な対象になりつつあるのではないか——、ヨーロッパの学者が言っていることではありますけれども、そういうものを考えていく必要があるのではないだろうかと思っております。

そのことに関連したことを一つだけ申しあげますと、まさに今年（二〇〇九年）、日本で臓器移植法の改正がありました。日本は、先進国の中で比べると、なかなか臓器移植の数が進んでいないということで、政府の方針が変わり、いままでは臓器移植をしますという明確な意思を示すカードを持っていないとできなかった臓器移植が、これからはその逆になって、生前に明確に「しない」と言わないかぎり、家族の同意があれば可能になるということになりました。

しかも、まだはつきりとは決まってはいたのですが、これまでは中立のコーディネーターによって、知らない人に臓器提供するというのが原則であったのが、今後は親族に優先提供するという可能性が出てきます。そうしますと、長年一緒に暮らしてきた家族が、他の家族の死を待つ、家族の死を願うというような無惨なことになる可能性もある。

こういような状況の中に、我々の生と死も入っていくということ

になります。こういうことに關しても、今後議論していくべきなのではないかと思ひます。

【池澤優】 私には、東京大学におけるプロジェクトの概容を説明してほしいというご要望がありましたので、おまかにご説明いたします。

我々はふだん「死生学」と呼んでいるのですけれども、正式には、二〇〇二年に二十一世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」というタイトルではじまりました。で、このCOEというのは center of excellence の略で、二十一世紀からの新たな學術拠点をつくるという目的で、日本政府が資金を出してプロジェクトを支援するという取り組みです。

当初は五年計画でしたが、二〇〇七年に更新され、今度はグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」と名称を変更しましたが、事実上継続して、現在八年目になります。このプロジェクトは二〇一二年までの予定です。

このCOEプロジェクトを立ちあげるにあたり、我々が「死生学」(Death and Life Studies)という枠組みで始めた理由の一つには、アメリカにおけるタナトロジー(「死学」)の伝統というものを見据えつつも、それをそのまま受け容れるのではなく、心理学や社会心理学に重心がかたよっているように見える、アメリカ流のタナトロジーに含まれているある種の問題点というか限界のようなものも考慮し、もう少し多角的な観点から死と、そして生を見つめなおせないかということがありました。

我々が考えた死生学の見取り図というのは、このようになります(図1)。このように、三つの中心があるという捉え方です。その中心の一つは、死に関する哲学的、あるいは、ある意味で批判的な考察です。

二つ目の中心は、現実に、社会の各地の文化において、死にかかわる文化がどのようなものであり、死がど

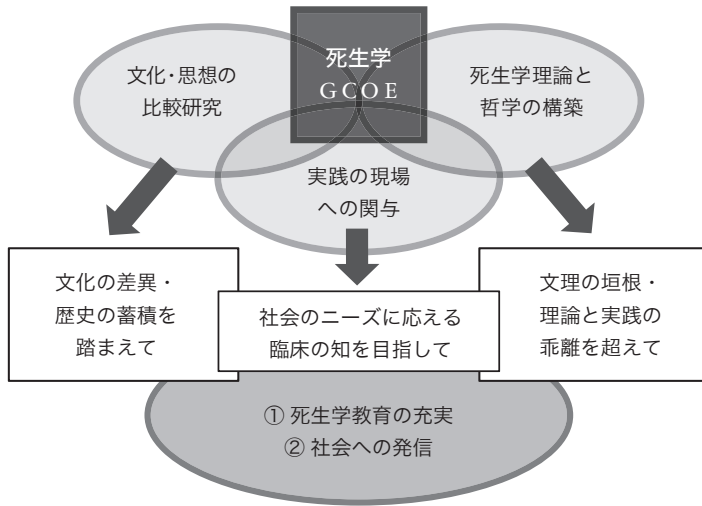


図1 東京大学「死生学」プロジェクトの主要な課題領域

のように表象されているかということについての、デイスクリプティヴな、あるいは歴史学的な研究になります。

そして三番目、最後が現場との接点でありまして、典型的には医療現場と連携していくという試みです。医療プロフェッショナルの方たちむけのリカレント教育など、現実へのかかわりですね。

この三つの極を総合的・有機的に統合し、個々の分野に分散しない、総合的な生と死に関する知の構築をめざすというのが、我々の死生学の構想の中心部分にあるものと言えるだろうと思います。すなわち、文献研究と臨床現場を両端として、それらから得られた知を哲学的な考察へ昇華させる、そこから得られた知見を文献研究と臨床現場へと回流されるといったダイナミズムが、我々の目指しているものになるわけです。

【林】 いまの池澤先生のご報告は、台湾側も非常に興味を持っているものです。今後、政治大学

でも研究を進めていくにあたって、とてもよい参考になるものだと思います。

それでは次に、蔡先生にご発言いただきたいと思います。

【蔡彦仁】 三人の先生からご感想や紹介をうかがいまして、特に最後に池澤先生がご紹介くださった、COEの方針や構成などを、非常に興味を持ってお聴きました。そのようなCOEの取り組みを背景に、台湾と日本が死生学の分野で協力していけたらと考えております。

死生学というのは、かなり広範囲にわたる学問で、精神治療や、老後のケア、安楽死、臓器移植などの問題が含まれています。医療現場においても、そのようなテーマを中心に、死生学に関連づけて研究が進められています。

今回の七名の発表者は、すべて人文学の分野、たとえば、哲学・文学・文化・宗教の立場から死生学を考えていますが、今日の七本の論文を通して、日本・中国・台湾、それぞれの文化や伝統にもとづいて死生について語っているけれども、その基盤はやはり儒教・仏教のなかにあるのではないかという考え・感想を持ちました。今後、こういったようなシンポジウムを通して、日台のさらなる研究協力を期待しております。

次に、午後、李先生と謝先生が報告された道教に関するご発表について申しあげますと、政治大学の宗教学大学院では、フィールドワークを重視し、特に民間信仰を中心に研究をしています。喪葬儀礼については、その指導にも携わっております。今回のご発表内容も、今後の交流・研究にいかしていきたいと思っています。

今日特に感激したのは、日本の三先生から、非常に有意義な話を聞くことができたことです。今後も共通のテーマを設けて、宗教や文化を越え、さらなる深い研究を一緒に進めていきたいと思っております。



蔡彦仁氏(左)、李豐楙氏(中央)、徐翔生氏(右)

【林】 それでは続いて、李豐楙先生からご発言いただきたいと思えます。

【李豐楙】 それでは私も、現在台湾の各大学で進められている「死生学」の現状について、少しご紹介したいと思います。

まず一つの方向性ですが、さきほど申しあげた傅偉勳先生のご研究のあと、南華大学で死生学研究所というものができました。この点に関しては蔡先生がよくご存じだと思いますが、一つには南華大学のよいうに学術的な方向に発展しています。また、これとは別に、もう一つ別の方向として、喪葬に関する事業と結びついているという側面です。この喪葬事業は、たいへん大きな事柄の一つでありまして、このことに関して、オーストラリアなどでも、毎年非常に多くの研究会や、集会が開かれております。

二つ目は、大学のカリキュラムに関することです。台湾大学の楊國樞教授が「死生学」を提唱されてから、ほとんどすべての台湾の大学において、——どうも政治大学にはまだないようなんですけれども——、「死生学」もしくは「死亡哲学」といった選択科目が開設されています。

特にこういったカリキュラムの設定に積極的なのが、医学系の大学

や看護学校です。というのも、「死生学」の問題は、彼らの仕事との結びつきが強い問題ですし、さきほどのお話にもあった臓器移植といった問題にも結びついてくる科目だからです。このような臨床的な問題を扱うような医師による教育だけでなく、宗教学や哲学をやっている学者による教育も含めたカリキュラムを、医師になる前に受けさせています。

各医学院の「死生学」のカリキュラム・授業では、かつては欧米の著作の翻訳を使うのが主流だったのですが、いまでは、そのような欧米のものから、仏教や道教のような、我々の地場社会に根ざしたものと、徐々に重心が移ってきています。このように「死生学」・「死亡学」の本土化とも言えるような動きは無視できない流れであり、特に台湾大学の医学部などでは、そういった傾向が顕著です。医療技術は世界共通ですが、しかし、死という事態に直面したとき、やはり我々が本来的に持っている文化体系というものを無視することはできなくなってくるわけです。

それから三つ目に、「生命教育」というカリキュラムをあげることができると思います。こういったことが起きているかという、特に若い人達の生命倫理に関する意識の問題、また若い人達の自殺の現象、自殺の若年化という傾向がありまして、こういったものと向きあっていかなければならないわけです。この「生命教育」という授業は、主に宗教学や倫理学の側面から開講されていて、特に輔仁大学・台湾大学などで積極的に進められております。

四つ目に、医学技術が世界共通だとしても、観念は絶対に違っているわけで、特に臓器移植というものに向きあったときに、台湾でもやはり親戚を優先するといった問題に直面して、どうしてもそういうことを議論しなければならなくなってきたという側面があります。

最後になりましたが、今後、「死生学」は学術として整備されていかなければならないものですので、今後

も東京大学とこのような機会をもって交流をし、ともに研究を推し進めていくことを希望する次第であります。

【林】 次に徐先生、コメントをお願いできますか。

【徐翔生】 それでは、本日私がなぜこのような、日本と中国の心中ものにまつわる死生観の違いということに関して発表したのか、その動機のところを簡単に話したいと思います。

私は大学時代、もともと文学作品が好きで、日本の文学に興味を持つようになり、川端康成や太宰治、三島由紀夫といったような作家の作品を読むようになりました。そのうちに、私の好きな作家が自殺して死んでいるということに気がついたわけです。そのあと、さらに夏目漱石の「こころ」や森鴎外の「阿部一族」というようなものを読みました。この二人の作家は自殺して亡くなったわけではありませんが、作品のなかにはつねに死の影がちらついているということに気がつきました。その後、日本語を学ぶようになり、武士道ですとか、近松門左衛門の作品などを読むようになったわけです。

その後、日本に留学して、日本にいた間に、日本人の死生観に関する研究をするようになりました。その後、いまに至るまで二十年の間、文学作品、古典的な作品の中の、生死にかかわる現象というものを調べてきたわけです。最近是比较宗教学・宗教哲学的な観点から、日本の死生学というものを考えるようになりました。そういうことで今回の発表になったわけで、日本と中国の心中ものの文学に見られる死生観の違いというものを通して、日本人と中国人の死生観の違いを、本日報告いたしました。

私個人の考えですけども、世界中の様々な文学のテーマは、それほど大きな違いがないのではないかと思います。どこの地域においても、愛や死といったものが、多くの文学作品の中心になっている、そう考

えることができるような気がしています。

そのような観点から中国と日本を比べますと、愛に対する考え方は、日本と中国の間でそれほど大きな違いがないように感じるのですが、死に対する考え方に關しては、非常に大きな違いが存在しているように思います。そのような考えから、さきほどの拙論を発表させていただいたわけです。もし問題があれば、ぜひご指導いただきたいと思います。

最後に、私が死生観を勉強して考えてきたことを、ご報告したいと思います。

まさにその言葉があらわしているように、日本語では死生観・死生学というのですが、台湾ではこれを生死学と呼んでおります。日本の研究は、基本的に死を中心にしていて、生に対する研究があまり多くないように思われます。私が台湾で論文を発表する際にも、多くの方から、そのようなご叱責を受けるわけです。

私はかつて、竹内先生のご指導のもとで、日本の思想を勉強しました。また、私の死生学の先生は、東京大学の宗教学の教授、島蘭進先生です。以前、島蘭先生に、なぜ日本人は死ばかりに言及して生に言及しないのか、ということがかがったことがあるのですが、そのときの島蘭先生は、生というものはその範囲が非常に広いので、どこを切り口にして、どこから入っていつて討論すればいいのかが非常に難しい、というお答えをくださいました。したがって、とりあえず死という現象から入っていく、そうでないと、生の全貌というものをつかむことはできないであろう、と。しかし、もし、死という観点から生を討論するのであれば、これは死生学の研究に大きな助けとなるのではないかと思います。

この点を本日質問された方がいらつしゃいましたので、私個人の経験としてこのような解答を申しあげたいと思います。

ここまでにいたしたいと思います。ありがとうございました。

【林】 それでは、最後の時間をフロアの方に開放したいと思います。時間はそれほど多くないのですが、もし何か質問があれば提出してください。

【福岡聡（東京大学COE研究員）】 蔡先生に質問があります。たいへん興味深いご発表、ありがとうございます。日本では、このように大規模な仕方で、死生観にかかわるアンケート調査は、まだおこなわれていないと思われるのですが、医療の分野に関係するところではいくつかの調査実績があります。老人ホーム、ホスピスなどの終末期医療の施設などで主におこなわれているのですが、東大の死生学も関係しているところでは、医学部の中川恵一先生が、がん患者とそれにかかわっている医療従事者の方の死生観に関するアンケート調査をおこなったりしています。

もし台湾でも、そういった医療分野での死生観についてのアンケート調査などがあれば、限られた領域ですが、けれども、日本と台湾の、実証的な死生観にかかわる比較研究ができると思うのですが、台湾ではそういう医療の分野での死生観に関するアンケート調査などはあるのでしょうか。

【蔡】 そのような調査は台湾でもおこなわれています。死生観は、医療社会学——医学の中でも社会学的分野では非常に大切な問題ですので、医学部、もしくは、医学校において、そういった調査が実施されています。おっしゃっているような大きな規模のものがあるかは、いまちよつとはつきりしませんが、多かれ少なかれ、おこなわれています。特に、がん末期患者に関するもの、安楽死、それから墮胎、さらに自殺などのテーマに関する調査がおこなわれているはずで。

少し補足させていただきますと、さきほど福岡さんがおっしゃったものは、ピンポイント調査、焦点調査と

言われるもので、私がいまおこなっているものは、サンプル調査といって、少し手法が違います。サンプル調査のような非常に広い人を対象にする調査を現在の台湾でおこなうのには、少し難しいところがあります。このような調査では、政府の機密情報であるとか、個人のプライバシーであるとか、そういったものにどうしても触れなければいけなくなってくるわけです。インタビュされる多くの方が、自分のプライバシーを外に漏らしたくないと思っているという傾向や、政府からの圧力であるとか、そういった阻害要素というのが多かれ少なかれあり、学者の方でもそういったことに関する顧慮を持っております。ただ、がん患者に対するもののようなピンポイントの調査は比較的实施しやすいので、そういったものは存在していると思います。

【フロア】 先生方、ありがとうございます。

徐先生にお尋ねしたいことがあります。先生は論文の中で日本と中国の二つの心中物を比較されましたが、それら二つの作品の時代背景は同じではありません。日本のものは十八世紀の作品で、中国のものは三世紀の作品です。さきほど、三世紀に



は仏教はすでに中国に伝来していたと先生はおっしゃいましたが、私の知るかぎりでは、当時仏教はすでに中国に伝来してはいましたが、実際には広まっていたわけではなく、浄土思想も隋・唐以降にようやく盛んになっていきます。ですので、浄土思想の来世という発想を中国人は受容することができなかったと判断されるのは、少し早計ではないかと思います。

二つ目の質問は、論文の中で先生が以下のように指摘されていることに關してです。日本人が、浄土思想の影響を受けて、殉情（愛情のために命を絶つこと）や来世に対して美しいイメージを抱きがちである一方で、中国人は、道教や儒教思想の影響を受けて、現実を重視する傾向にあり、殉情や来世を好ましいものとして描写することはあまり多くない、というご指摘です。このことに関して私が知りたいのは、中国人の現実重視という性格は心理学的にも認められていることですが、もともとその民族が持っている心理的特質と文化的影響の、どちらが因でどちらが果ということですか。

たとえば、日本人は死というものをとかく美化しがちです。これは日本人の本来的特質であって、それがあつたからこそ、後に仏教を吸収したのでしょうか、それとも、仏教の浄土思想の影響を受けた後に、死を美化しはじめたのでしょうか。日本と同様に、中国も浄土思想の影響を受けましたが、浄土思想が来世に対する好ましいイメージをかき立てて自殺を引き起こしたということはありません。先生によると、日本の心中物には浄土思想の影響が多く見受けられるとのことですが、正統な仏教思想では自殺を奨励することはけつしてありませんし、もし仏教が正しく理解されているならば、両者を結びつけることはできないのではないのでしょうか。いずれにせよ、私がお尋ねしたいのは、心中は本来的な日本の文化なのか、それとも仏教の影響を受けてのものなのかということです。

【徐】 まず、なぜ三世紀の中国の文学作品と、十七世紀の心中物とを比べたかを申しますと、この論文に取りあげた中国の心中物は、中国のただ唯一の心中物で、他に心中物が見つかからないからです。

また、日本ではいつから死が美化されてきたかに関しては、『古事記』には死後黄泉の国に行くという記述がありますが、その当時の日本人は死という事実を認めてはいても、死を美化する傾向は見られないと思います。やはり仏教が入ってから、特に浄土教が入ってから、日本人は死を美化するようになったのではないかと思います。

【フロア】 蔡先生の調査中の観念の定義に関して質問があります。たとえば、貧しい人々は死後に生まれ変わるというように、先生は台湾の民間レベルでの仏教の影響の大きさを明らかにしたいとお考えのようですが、それとは別に、祖先を祀ることで祖先の加護を受けることができるというこの発想は、儒家の孝道倫理の思想によるものです。私の知るところでは、道教は様々な仏教思想を吸収した後、さきの民俗信仰と同様に、死後転生の観念を持つようになったと思いますが、先生は仏教思想の影響の境界線をどのようにお考えでしょうか。

【伊藤由希子（東京大学COE研究員）】 本日、李先生と謝先生のお話をうかがっていて、鎮魂、魂を鎮めるということの問題について考えておりました。

竹内先生もおっしゃっていましたが、私も、両先生のお話で、台湾の人々は、死者の魂を鎮めるべく、生者の側から死者に対して具体的にはたらきかけていくという点に、とても興味を持ちました。

日本の場合は、たとえば有名な菅原道真という高官が左遷された先で不遇の死を遂げた後、京で様々な異変が起きたことを道真の祟りだとして、その魂を鎮めるため、道真を天神、つまり神として祀ったり、あるいは、

元寇の際に元側の犠牲者、つまり敵方を祀るといったような、自分にとって親しくない死者の魂を鎮めようとする例が多くあります。そのような場合は、鎮魂、魂を鎮めるということが、自分たちが親しくない死者に對しても、とにかく怒らないでください、どうぞ安らかに魂を鎮めてくださいということをお願いし、はたらかけるというようなかたちになっているように思います。

台湾の場合、親しくない者や、非業の死を遂げた敵方の人々に對して、そのようにはたらかけ、鎮魂をするというようなことはあるのか、あるとしたらどうかたちであるのかということを、お教えいただければと思います。

【李】 簡単にお答えしたいと思います。

疎遠な人、深い関係がない人に對しても、日本では鎮魂のようなことがおこなわれてきたということでしたが、そのような例は台湾にもあります。それは、鎮魂の儀式であったり、あるいはそのような人々をお祀りするということなのですが、具体的なものの一つに、オランダ人を祀るという例があります。もともとは台湾に入ってきたオランダ人を祀っていたお墓が、ある種の祭祀をおこなう場になっていったという例です。それから、もう一つ、日本軍が台湾を統治していたときに軍人が神格化され、祭祀がおこなわれるようになったという例もあります。これもやはり、死者となった軍人が怒ったり、崇りをなしたりしないようにという鎮めでもあります。ある種の宗教活動と言えるのではないかと思います。

また、さきほど、儒教と道教をどう規定するのか、そして、その影響をどのようににかつていくのかということに関して質問がありました。これはたいへんありがたい質問だったと思います。これは確かに非常に難しい問題で、今後私もそう簡単におおざっぱな分け方をしてはいけないなと思いました。いまのところはそ

のようにお答えすることしかできないのですが、今後気をつけたいと思います。

【林】 討論はここまでにしたいと思います。みなさん、ありがとうございました。

閉会

【竹内】 会を閉じるにあたりまして、いろいろお世話になりました政治大学のみなさんに、あらためて御礼を申しあげます。会場・食事・送迎等、特に徐先生には本当にお世話になりました。本当にありがとうございました。

【蔡】 私も宗教学大学院を代表しまして、遠路はるばるいらしてくださいました東京大学の研究者のみなさまに、感謝の意を表したいと思います。特にご発表くださった先生方、まことにありがとうございました。また、今回の会議の準備を中心となってくださった徐先生、ありがとうございました。このような機会をまた持てたと思っています。みなさま、ありがとうございました。



台日學術研討會

東亞生死學

10/30

邀請教授：竹內瑩一、池澤優、金森修、土屋太祐、福間聡、伊藤由希子、
郭承天、關東寅、蔡源林、黃柏棋、李豐楙、謝世維、蔡彥仁、徐翔生、林鎮國

全場備有中、日文翻譯

地點：政大行政大樓7樓第2會議室
主辦單位：國立政治大學宗教研究所

